

ミステリ読書案内

2023. 12. 22 発行元

第538号 伊藤 剛

<https://mystery-dokuan.com>

知念実希人「吸血鬼の原罪」

10月に実業之日本社文庫から知念実希人の『天久鷹央の事件カルテ』シリーズの最新刊『吸血鬼の原罪』が出た。14巻目になる。現役の医師が書いた「医療ミステリ」の代表的な存在になっている。

実業之日本社文庫に移転

これまでこの『天久鷹央の事件カルテ』シリーズは新潮文庫nexから出版されてきた。本作から実業之日本社文庫に移転することになったようだ。経緯についてはわからないけれども、第一作の『天久鷹央の推理カルテ』から第十三作目の『生命の略奪者』まで、順次実業之日本社文庫に移転する計画に見受けられる。その際、新潮文庫版に掌編を加えて「完全版」と名乗ることになったらしい。人気シリーズなので、この機会に新たな読者を獲得しようという働きかけなのだと思う。

今回は長編としての構成

本書『吸血鬼の原罪』は長編。「吸血鬼」をテーマにしたミステリは他の作家でも多数出ているので、何となく「既読＝どこかで読んだ…」ような錯覚に陥ってしまう。プロログで東久留米市の公園で死体と出会う場面からスタートする。

遺体の首にふたつの傷跡が残り、

雷光の中に浮かぶのは二本の犬歯が覗く青白く痩せた男。この吸血鬼絡みの連続殺人事件が三つ続いたのである。

そして、天久鷹央、小鳥遊優、鴻ノ池舞といういつものメンバーが登場してくる。この三人の関係は毎回変わらない。物語の語り手である小鳥遊は鷹央にこき使われ、舞にはからかわれ…のお馴染みのパターン。警視庁捜査一課の桜井刑事と所轄の成瀬刑事が天医会総合病院を訪ねてきて、事件の話をして、不本意ながら巻き込まれていく。被害者はほとんどの血液を抜き取られていて、傍には水晶のストラップが落ちていた…など。

「医療ミステリ」になるには…

作者の知念実希人は現役の医師。本シリーズも「医療ミステリ」として展開してきているので、「吸血鬼」もその方向でまとめ上げなければならないところがポイント。巻を重ねるごとに取り上げる病気も特殊なものになっていくようだ。

《天久鷹央推理・事件カルテ・シリーズ》

1. 天久鷹央の推理カルテ
2. ファントムの病棟
3. 密室のパラノイア
4. 悲恋のシンドローム
5. 神秘のセラピスト
6. スフィアの死天使
7. 幻影の手術室
8. 甦る殺人者
9. 火焰の凶器
10. 魔弾の射手
11. 神話の密室
12. 久遠の檻
13. 生命の略奪者
14. 吸血鬼の原罪

今回は、他の病院に潜り込み、その医師と会話したり、保管されている医療データを読み取ったりすることでストーリーに深まりをつけている。ただどうしても中心メンバー三人のやり取りにかなりのページが割かれている気もする。楽しい会話が続いていることは間違いないが…。話の範囲がもう少し広がるとよいような気がする。

今後の作品に期待を…

私にとっては『硝子の塔の殺人』のようなミステリが増えてほしいと思っている。この『天久シリーズ』では難しいかもしれないが、大きな「謎」への挑戦を期待したい。

石持浅海「あなたには、殺せません」

7月に東京創元社から出た

本。『紙魚の手帖』に連載された5編を集めた短編集。犯人側から描く「倒叙もの」のパターンなのだが、工夫されているのは、完全犯罪を行うためにNPO法人の相談員に「事前相談」に行くという形式である。この相談員、殺人を考えている人から持ちかけられる「殺人計画」を細かく分析し、考慮不足の点を鋭く指摘し、失敗のリスクをあらゆる方向から並べ、「これでは上手くいきそうにないから止めるように」という話に進めていくのである。それを聞いた犯人がどう行動するかというところ…。ここが読みどころの重要ポイント。

第一話の『五線上の殺意』は高校時代から長年コンビを組んでいた相手に作詞作曲を盗られてしまった男の訴え。『1』のドアは「人を殺めようとする人が入る部屋」。相談員は淡々と感情のこもらない声で会話を進めていく。殺害方法について考えを深める。絶対に捕まらないようにするにはハードルが高いことを示す。凶器は何に…、どんな場所で…、もし反撃されたなら…、「あなたが殺害を実行するのが、いかに無謀かおわかりでしょう。思い留まることをお勧めします。」となる。犯人はそれで納得したような返事をするのだが…。第二話以降も犯人と被害者の関係に変化を持たせてワンパターンに陥らないように考えられている。